

うに嵌入されている。したがって嵌入の方法としては、左右に異った面を見せる場合と、同じ面を見せる場合があったといえるであろう (Gening, V. F., Petrin V. T. 1985)。

第 4 節 荒屋型彫刻刀の分布－大陸と日本－

1. 日本

第 1 次発掘の直後に発表した予報 (芹沢 1959) の中では、日本列島における荒屋型彫刻刀の分布は北海道に 5 カ所、本州に 1 カ所の計 6 カ所にすぎなかった。しかし 44 年後の現在では、北海道に 51 カ所 (第 7.13 図)、本州に 47 カ所 (第 7.14 図)、計 98 カ所におよんでいる。とくに北海道に分布の濃密な中心があり、西南日本にはほとんど及んでいないことが明白となっている。

荒屋型彫刻刀の出土地

a. 北海道

1	浅茅野	猿払村	23	みどり 1	美幌町
2	豊別 5	稚内市	24	上似乎・上似乎 2	帯広市
3	モサンル	下川町	25	落合	帯広市
4	日進 2	名寄市	26	空港南 B	帯広市
5	札滑	西興部村	27	空港南 A	帯広市
6	タチカルシュナイ A・C	遠軽町	28	大空	帯広市
7	ホロカ沢 (遠間地点)	白滝村	29	暁	帯広市
(7～11は白滝遺跡群)			30	札内 N	幕別町
8	服部台 2	白滝村	31	居辺 17	上士幌町
9	白滝 37	白滝村	32	東麓郷 1	富良野市
10	白滝 32	白滝村	33	嵐山 2	鷹栖町
11	白滝 4	白滝村	34	メボシ 2	千歳市
12	置戸安住	置戸町	35	祝梅三角山上層	千歳市
13	増田	置戸町	36	丸子山	千歳市
14	吉田	置戸町	37	オサツ 16	千歳市
15	緑丘	訓子府町	38	柏台 1	千歳市
16	吉井沢 B	北見市	39	材木沢	赤井川村
17	中本	北見市	40	曲川	赤井川村
18	北進	北見市	41	都	赤井川村
19	北上台地	北見市	42	峠下	倶知安町
20	常川	常呂町	43	狩太	倶知安町
21	広郷・広郷 8	北見市	44	立川	蘭越町
22	元町 3	美幌町	45	オバルベツ 2	長万部町

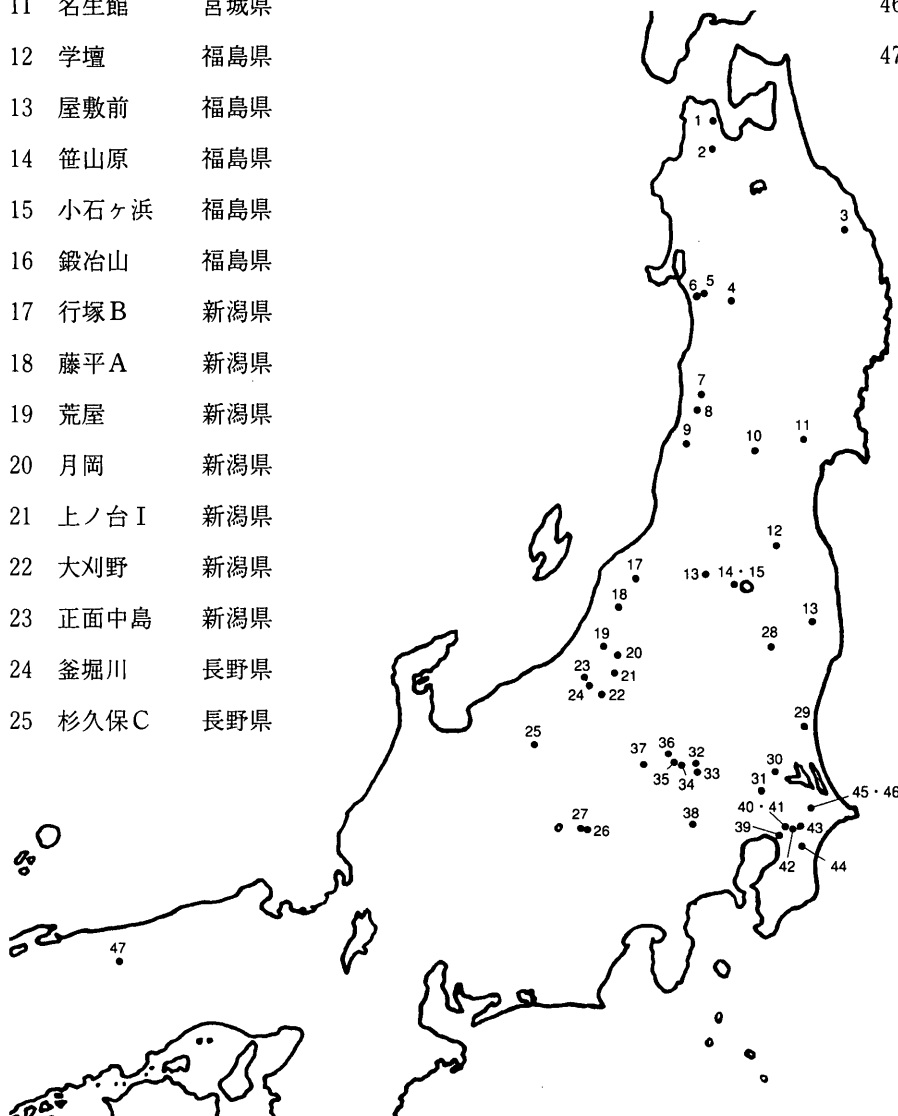
- | | | | |
|----------|-----|----------|------|
| 46 美利河 1 | 今金町 | 49 石川 1 | 函館市 |
| 47 神岡 2 | 今金町 | 50 新道 4 | 木古内町 |
| 48 トワルベツ | 八雲町 | 51 湯の里 4 | 知内町 |



第7.13図 北海道における荒屋型彫刻刀出土遺跡の分布
Fig.7.13. Distribution of Araya burin in Hokkaido.

b. 本州

1 大平山元 I 青森県	26 中ッ原 5 B 長野県	36 上原 群馬県
2 隠川 (2) 青森県	27 矢出川 長野県	37 落合 群馬県
3 早坂平 岩手県	28 那須官衙関連 栃木県	38 白草 埼玉県
4 米ヶ森 秋田県	29 後野 B 茨城県	39 草刈六之台 千葉県
5 下堤 D 秋田県	30 中原 茨城県	40 木戸先 千葉県
6 狸崎 B 秋田県	31 柏原 茨城県	41 和良比 千葉県
7 宮山坂 F 山形県	32 大雄院前 群馬県	42 木戸場 千葉県
8 八森 山形県	33 強戸口峯山 群馬県	43 高岡大山 千葉県
9 越中山 M・S 山形県	34 頭無 群馬県	44 大網山田台 No 8 千葉県
10 角二山 山形県	35 鳥取福蔵寺 II 群馬県	45 東峰御幸畑西 千葉県
11 名生館 宮城県		46 一鍬田甚兵衛山 千葉県
12 学壇 福島県		47 恩原 2 岡山県
13 屋敷前 福島県		
14 笹山原 福島県		
15 小石ヶ浜 福島県		
16 鍛冶山 福島県		
17 行塚 B 新潟県		
18 藤平 A 新潟県		
19 荒屋 新潟県		
20 月岡 新潟県		
21 上ノ台 I 新潟県		
22 大刈野 新潟県		
23 正面中島 新潟県		
24 釜堀川 長野県		
25 杉久保 C 長野県		

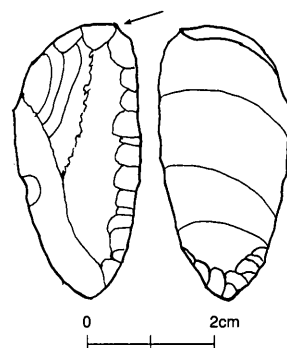


第7.14図 本州における荒屋型彫刻刀出土遺跡の分布

Fig.7.14. Distribution of Araya burin in Honsyu, Japan.

2. シベリアと沿海州・サハリン

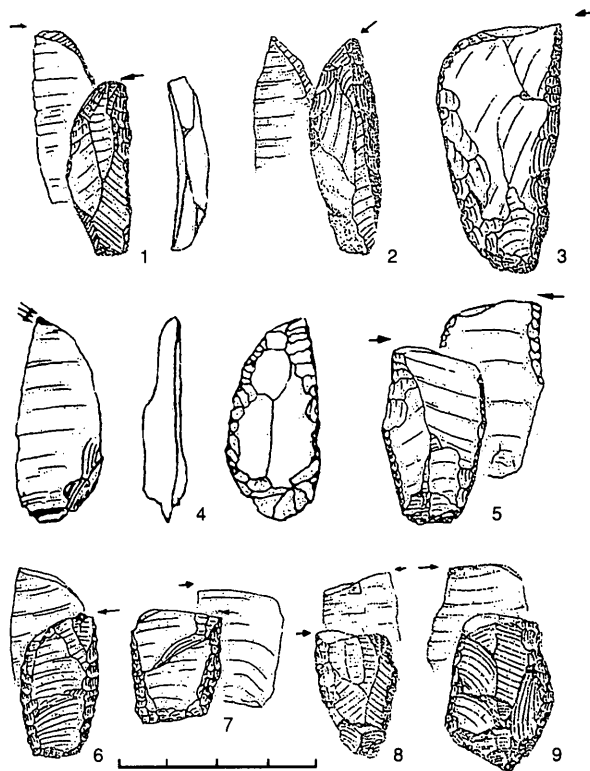
ノボシビルスクの考古学・人類学研究所には、A. P. オクラドニコフの発掘したウスチ・キャフタ出土資料が所蔵されており、その中に第7.15図に示すような彫刻刀が1点含まれている。背面の右側辺には細かい剥離痕が並んでおり、その上端から左に彫刻刀面が刻まれている。腹面の下端、バルブのあった部分には、七面ほどの細かい剥離痕が加えられており、日本の荒屋型彫刻刀に酷似している。しかもその基部の先端部には、肉眼でも判るほどの磨耗痕が認められるのである。キャフタからは12,000年BPと測定された土器片も出土しており、この彫刻刀が土器に伴って出土したものか、それ以前のものかは不明であるが、貴重な資料である。また、イルクーツクに近いヴェルホレンスカヤ・ガラーからは、第7.16図のような彫刻刀が多く発掘されている。1～3は第1層から、4と5は第2a層から、6と7は第2層から、8は第3層からそれぞれ出土したという。ロシアではこれらをヴェルホレンスカヤ型彫刻刀と呼んでいるというが、きわめてよく荒屋型彫刻刀に類似している。しかし両者を比較してみると、ヴェルホレンスカヤには、3・5・7・8のような彫刻刀の軸と彫刻刀面の角度が直角となるトランスヴァース型が多く、さらに彫刻刀面が左肩から右肩へ剥離されたものが少なくない（同図5・7・8）という点である。なお、加藤晋平（1988）は荒屋型彫刻刀の特色はトランスヴァース型であると述べているが、それは事実ではない。



第7.15図 ウスティ・キャフタ出土の彫刻刀
Fig.7.15. A burin from Usti Kiakhta, Siberia.

1984年の6月、アルタイのデニソヴァ洞穴発掘に参加したあと、芹沢はイルクーツクにある古い教会の3階にあった研究室で、ウスチ・カレンガ出土の資料を実見する機会を与えられた。ウスチ・カレンガは細石刃を主体とする遺跡であり、おびただしい数の荒屋型彫刻刀が伴出し、さらにジグザグの沈線文を持つ尖底土器10個ほどが復元されていたのには驚嘆したのであった。年代を聞いてみると、大体8,000年前であろうということであったが、その後の年代測定によって11,000～12,000年BPという結果が出ているので、ほぼウスチ・キャフタの年代と同じと考えてよいだろう。

なお、アルタイのデニソヴァ洞穴発掘中に9 D層から出土した石器の中に、立派なバックド・ブレイドと荒屋型彫刻刀それぞれ1点を見つけることができた。木村英明（1997）

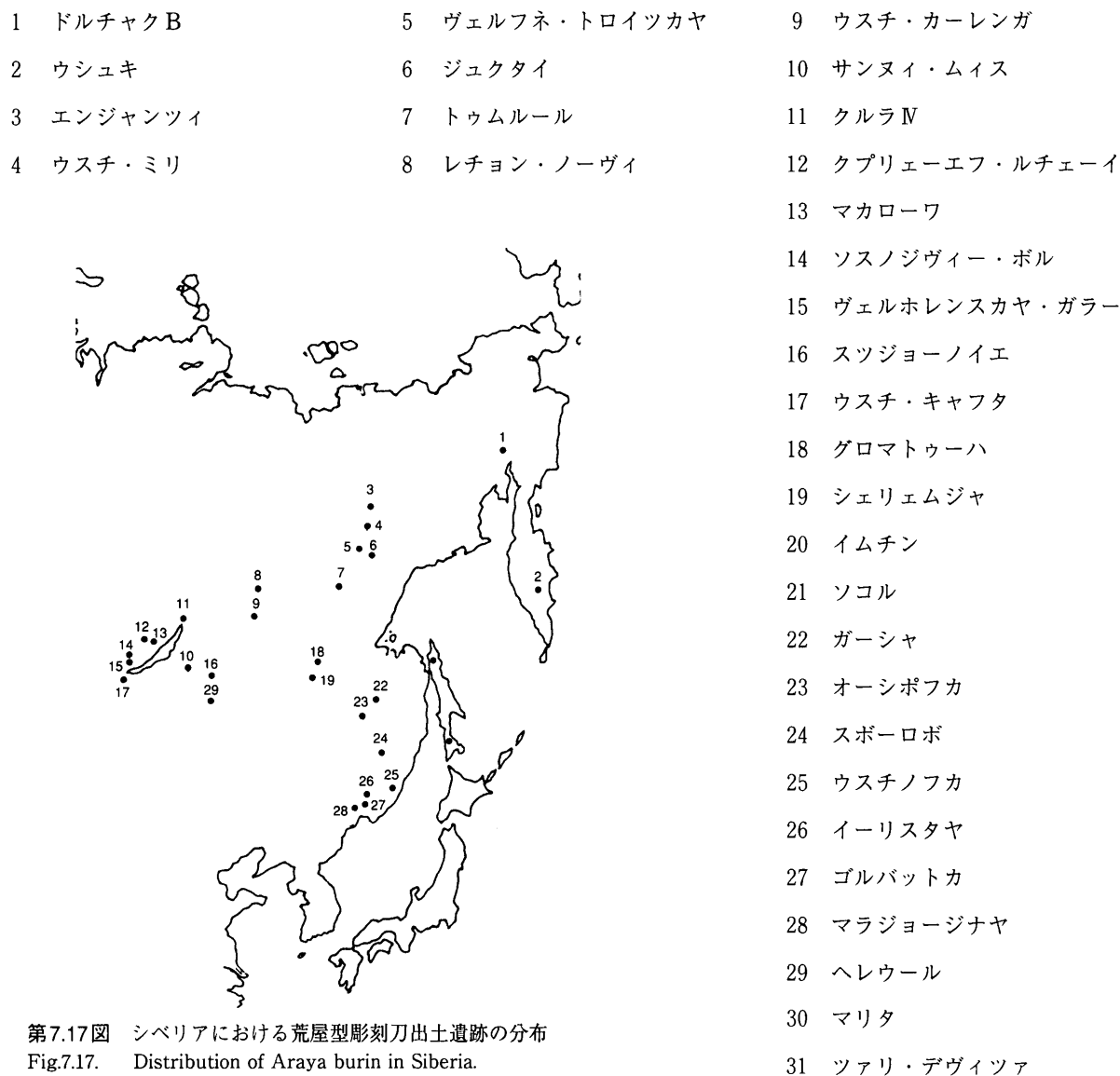


第7.16図 ヴェルホレンスカヤ・ガラー1遺跡から出土した彫刻刀 (Aksenov, M.P. 1980)

Fig.7.16. Burins from Verkholenskaya Gora 1, Siberia.

も1点の荒屋型彫刻刀を図示している。11層は15,000～12,000年BPと考えられている。これはシベリアにおける荒屋型彫刻刀の分布の最西端の資料とってよいだろう。

つぎに掲げるのは、梶原洋によって集計されたシベリア・沿海州・サハリンにおける荒屋型彫刻刀の出土地名とその分布である（第7.17図）。



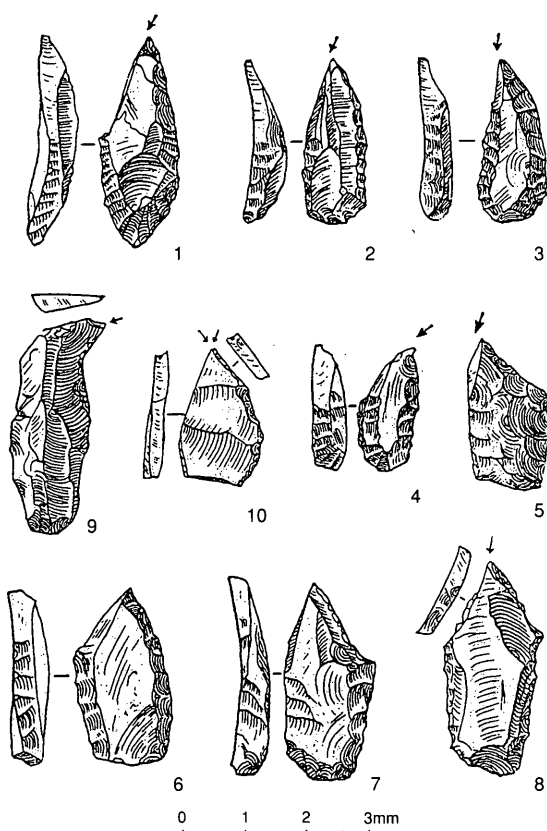
第7.17図 シベリアにおける荒屋型彫刻刀出土遺跡の分布
Fig.7.17. Distribution of Araya burin in Siberia.



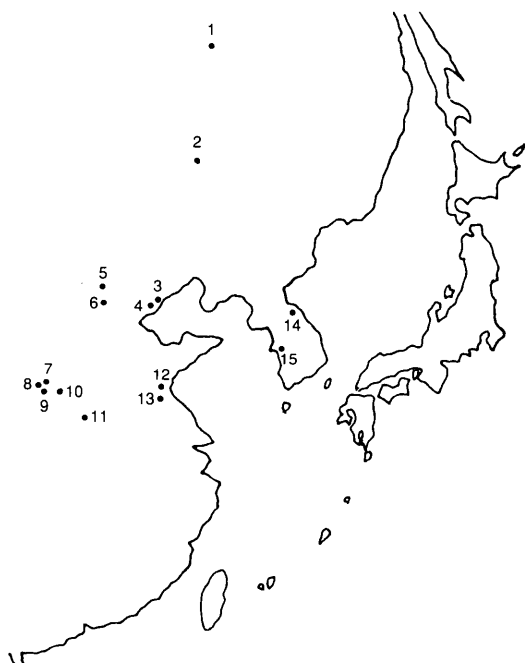
第7.18図 中国山西省下川遺跡出土の彫刻刀（山西考古学研究所）撮影芹沢長介
Fig.7.18. Burins from Xiachuan, China.

3. 中国と韓国

1982年5月28日、芹沢は中国の山西考古学研究所の王健所長の御配慮によって、山西省出土の旧石器資料を手にとって観察・撮影する機会を与えられた。その際、下川から発掘された資料の中に荒屋型に酷似した彫刻刀が7～8点あることに気づいた。第7.18図はその時に撮影した写真の一部であり、第7.19図は下川遺跡の発掘報告に発表された彫刻刀の実測図である（王健他 1978）。なお、鄧聰・盖培（1986）は、これらをXiāchuān burinと呼称している。また、中国においてこれまでに確認された荒屋型彫刻刀出土遺跡を列挙すれば次のようになる。



第7.19図 中国・下川遺跡出土の彫刻刀 (王健他1978)
Fig.7.19. Burins from Xiāchuān, China.



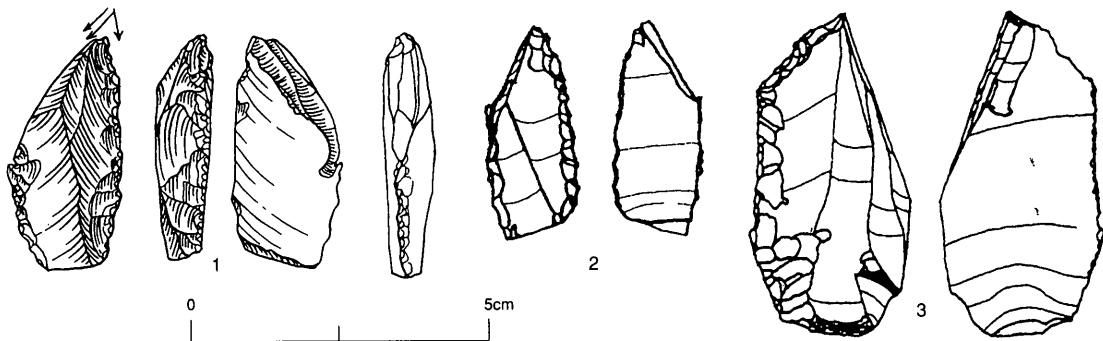
第7.20図 中国および韓国における荒屋型彫刻刀出土遺跡の分布
Fig.7.20. Distribution of Araya burin in China and Korea.

- 1 十八站 (黒龍江省)
- 2 缸窑 (黒龍江省)
- 3 嘎查 (吉林省)
- 4 東灰山 (河北省)
- 5 虎頭梁 (河北省)
- 6 油房 (河北省)
- 7 丁村柴寺7701地点 (山西省)
- 8 柿子灘 (山西省)
- 9 固隆 (山西省)
- 10 下川 (山西省)
- 11 靈井 (河南省)
- 12 爪墩 (江蘇省)
- 13 黒龍潭 (山東省)

中国における荒屋型彫刻刀の分布は、黒龍江省・吉林省・河北省・山東省・山西省・江蘇省にまたがっていて、中国北東部に限定されているようである (第7.20図)。このような分布は、やはりシベリアのバイカル湖周辺に濃密な分布が見られることに関連しているであろう。また、この地域に近い朝鮮半島では、上舞龍里 (第7.20図14、第7.21図2・3) と石壮里 (第7.20図15、第7.21図1) の2カ所から発見されているだけであり、きわめて稀であるといつてよい。

4. アリューシャン・アラスカ・グリーンランド

吉崎昌一は1962年8月から64年4月まで、C. S. チャードの招きによって招聘研究生としてトロントに滞在した。トロントに到着して間もなく、アラスカの古人類研究を専門とするW. S. ラーフリンが、アリューシャン列島のアナングラ島から採集されたという石器と石片を持参して見てほしいというのであった。吉崎がそれらを検討すると石核や剥片だけでなく、中には彫刻刀の削片 (ビュアリン・スポール) が混じっていた。さらに数日後、W. N. アーヴィングが内陸アラスカで発見したという1個の石器を吉崎に提示した。驚くべ

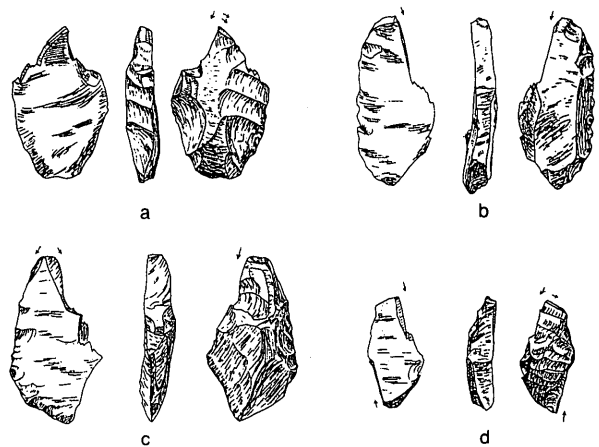


第7.21図 韓国出土の彫刻刀 (Sohn Pokee 1993およびChoi-bokyon 1989) 1 石莊里 2・3 上舞龍里
Fig.7.21. Burins from Sokchang-ni and Sangmuryong-ni, Korea.

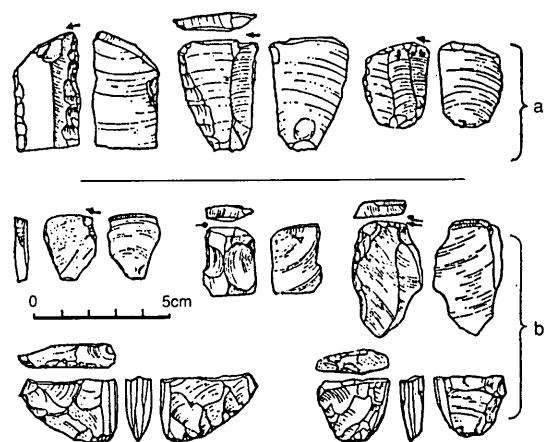
きことに、それはまさに日本の荒屋型彫刻刀と同じものであった。それまで、アラスカのケイプ・デンビーから彫刻刀が発見されていたのだが、それらはかなりアメリカナイズされた特殊な形態を持っていたのだった (第7.22図)。

アジア的な荒屋型彫刻刀がアリューシャンやアラスカから発見されるという事実が注目されはじめ、チャードはアナングラ島の発掘調査を計画した。1963年の2月、R. ネルソン、A. マッカートニー、吉崎昌一の3人はアナングラ島の調査に出発したが、のちにW. F. ラーフリンと地質学のR. F. ブラックも参加した。アナングラ島は南北が2.6kmの小さな無人島であり、樹木は1本も生えていない。問題の遺跡は海拔18mの狭い舌状台地にあり、植生が剥げて土が風に飛ばされた風食凹地がいくつも見られた。その穴の一つから、吉崎は3個の彫刻刀をたちまち発見したのだった (第7.23図)。3日目になると、30個の彫刻刀が手元に集められた。

「地層は、地表にツンドラ植生がのっかっており、浅い腐植土の下には白あるいは灰色の火山灰などの火山噴出物が層をなして次々に重なっていた。台地の奥の方にくるに従って、地層の下半分はローム層がかってくる。そして、こうした今まで遺物の発見されたことのなかった古い火山灰層の下から炭化物

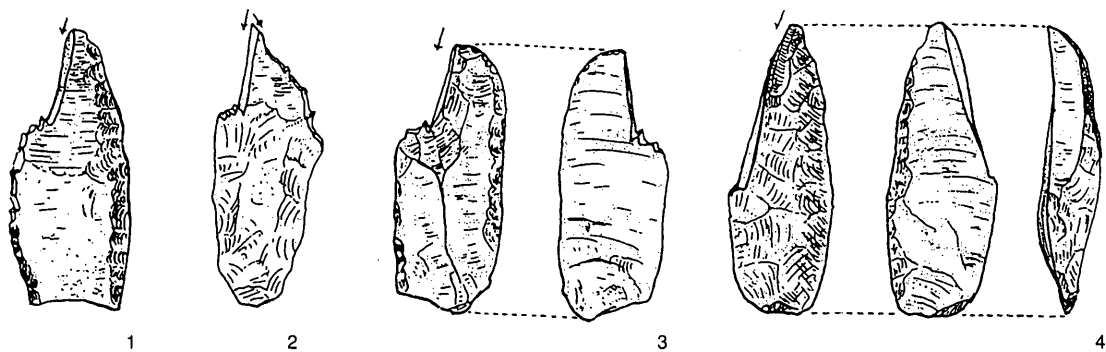


第7.22図 アラスカのケイプ・デンビー出土彫刻刀
(Giddings, J.L.1964)
Fig.7.22. Burins from Cape Denbigh, Alaska.

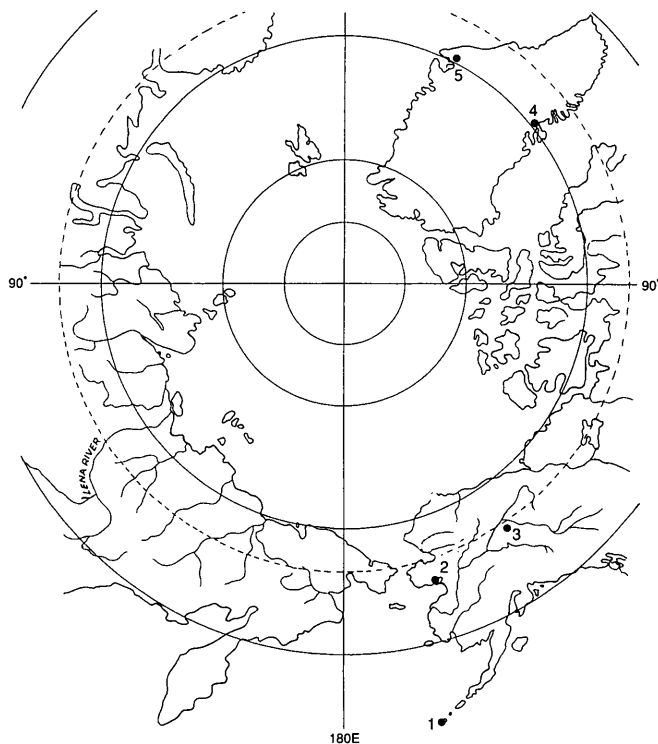


上段=アナングラ遺跡のビュリアン
下段=キャンパス遺跡のビュリアンとマイクロ・コア

第7.23図 アナングラ遺跡とキャンパス遺跡出土石器
(吉崎・乳井1980)
Fig.7.23. Burins and microblade cores from Anangula and Campus, Aleutian and Alaska.



第7.24図 グリーンランド・パレオエスキモーの彫刻刀 1・2 Sarquaq 3・4 Scoresbysound (J.Meldgord 1952)
Fig.7.24. Burins of Paleo-eskimo, in Greenland.



第7.25図 アリューシャン・アラスカ・グリーンランドにおける
荒屋型に類似する彫刻刀の分布 (1. Anangula
(アナングラ) 2. Cape Denbigh (ケイブ デンビー)
3. Campus (キャンパス) 4. Sarquaq (サルクアク)
5. Scoresbysound (スコレスバイサウンド))

Fig.7.25. Distribution of bunins similar to the Araya burin in
Aleutian, Alaska and Greenland.

や石器が見つかったのである。火山灰はところどころ途切れ、あるいは波打ったりしているものの、それほど凍結の影響を受けていない感じがした。

結局、この発掘でわれわれは住居址か貯蔵穴と見られる直径約二メートルのピットを三ヵ所確認した。採取した木炭片のC14測定と火山灰の層序によって、遺跡の年代は八五〇〇—一万年前ということになった。」(吉崎昌一・乳井洋一 1980)

このようにして、アリューシャンおよびアラスカの西部には荒屋型彫刻刀にきわめて近似する資料が分布している事実が明らかにされた。しかも、それまでに知られていたケイブ・デンビー型のアメリカナイズされた彫刻刀の分布は、さらに東方に伸びてグリーンランドへまでも達していることが報じられている。アナングラの石器組成は多面体の石核と石刃、細石刃核と細石刃、スクレイパー、ナイフ、彫刻刀などであり、石材にはチャート、黒曜石、緑色の珪質岩などであり、黒曜石は

ウムナク島のケープ・チャガクから持ちこまれたものである。なお、チャガクというのはアリュート語で黒曜石という意味であるという。特に注意すべきは、アナングラでは両面加工の尖頭器が見られないという事実である。これまで発見されてきたアラスカの遺跡からは、必ずといってよい程両面加工尖頭器が出土している。したがって、アナングラの石器組成は両面加工尖頭器を持つケイブ・デンビー文化に先行するものであると吉崎は考えた

のであった。おそらく約1万年前にシベリアあるいはカムチャッカからアリューシャン・アラスカへ石刃・細石刃・荒屋型彫刻刀を持つ文化が伝えられ、3,000年BCあたりに両面加工尖頭器を持つケイブ・デンビー文化が発達し、さらに1,000年BCからグリーンランドのサルクァク文化、さらにドルセット文化が続いたのであろう（第7.24図）。荒屋型彫刻刀の伝統はこのようにして、地球を半周するほどの足跡を印しづけているのである（第7.25図）。

第4節をまとめるに当って、日本の北海道は横山英介、本州は鹿又喜隆、中国は鄧聰、韓国は柳田俊雄、シベリアは梶原洋、アリューシャン・アラスカは吉崎昌一の手をわずらわした。記して謝意を表するものである。